明治大学
商学部

し

国語問題

はじめに、これを読みなさい。

（注意事項）

1. この問題用紙は十八ページまである。ただし、ページ番号のない白紙はページ数に含まない。
2. 解答用紙の所定の欄に、必ず氏名を記入すること。
3. 解答用紙には受験番号が印刷されているので、受験番号が正しいかどうか受験票と照合して確認すること。
4. 解答はすべて「解答用紙」の解答欄に記入またはマークすること。解答欄以外のところには何も記入しないこと。
5. 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル（いずれもＨＢ・黒）で記入すること。
6. 訂正は消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
8. **文字は楷書で正確に書くこと。**
9. **解答用紙は持ちかえらないこと。**
10. この問題用紙は必ず持ちかえること。
11. 試験時間は六十分である。

（マークの記入例）

良い例	悪い例
●	◎ ⊗ ○

(一)

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

現在の教育制度のもとでは、学校(学歴)が職業的地位を決める重要な要素となっている。自由な進路選択、そして個人の適性に合ったポストの選択を可能とするためには学校教育が不可欠である。

ただし選択の自由を優先した場合には、特定の選択肢に人々が集中しやすい。そこで公平に適切な人を選抜しなければならない。適切な人とは、有能であったり、その地位にふさわしかったりする人になる。ただ、客観的なふさわしさの指標を見つけるのは難しい。かといって、いい加減な指標だと、選抜に対する疑念が生じ、教育制度は社会的正当性を失う。

一般に私たちは、学校は社会のニーズに合った教育を提供すべきだ、と考えがちだ。A社会に教育を従属させて考え、そうなっていない現状を嘆き、より社会に有用な知識を身につけさせるための教育改革を進めたがるのである。これに対し、ジョン・マイヤーとブライアン・ローワンは発想の転換を迫る。

彼らに言わせれば、学校教育はそういった機能性を意識して作られたものではない。教育によって人々の知識水準が上昇し、そうした人々の増加により社会が発展するという説明は、近代合理主義の前提に立っている。

こうした「知識水準の上昇が社会の発展を促す」という説明の妥当性は、厳密に検証するのが困難だ。しかし近代社会において、この説明は規範性を帯びるようになる。換言すれば、近代国家で、組織的に人々を社会化するためには、学校教育制度の成立・維持がもっとも合理的だと信じられている。この説明は実証されないまま信じられているので、マイヤーらは「神話」とよび、B教育制度は、神話によって成立する一つの宗教のようなものだという。

国家は、学校教育を含むしかるべき近代的な組織をもつのが当然であり、そういった組織や制度をもたない自称国家は、近代国家と見なされない。だから近代化の過程で、どの国も同じような官僚制組織の政府、治安組織、学校などの制度を構築する。

つまり近代化を進めるために、こうした組織が作られるのではない。そうではなくて、自分たちの構築する国家が、近代国家だと自ら示すために、組織を作るのだ。その学校組織や教育制度に、人々は影響を受けて行動するのである。

ア　マイヤーらにいわせれば、社会が学歴を必要としているのではない。学歴評価システムが先に構築され、正当な評価装置と認められて、社会全体に広がるのだ。学校知は世間のニーズに応じてもたらされるのではない。社会的に正当と認められた学校知を使用するから、社会的信用を得られる。だから学校知への需要が高まるのだ。

イ　学校は、近代化に伴い整備された一種の官僚制組織である。一般的に官僚制組織とは、組織内が機能分化し、全体も階層化された組織となっており、それぞれの権限も明確である。規則が組織を支配しており、私情を挟むことは許されない。地位やポストも特定の人物が占有できず、資格をもったものが職員として採用される。

しかし学校を、典型的な官僚制組織と見なすのは、やや無理がある。学校は、組織内の部署や役割の分化の程度があまり進んでおらず、専門職の教師が基本的に個人の裁量に従って授業などの教育活動を行っている。仕事の範囲は明確ではなく、仕事内容は多岐にわたる。特に日本の学校組織は、その傾向が顕著だ。

ウ　官僚制組織では、マニュアル通りに、基準や規律を守って運営されるのが原則だ。しかし学校では、教育的配慮から、児童生徒に対して、常に厳格に、お決まりの形で対応するとは限らない。子どもが失敗しても、何らかの形で子どもを救い上げようと努力する。

多様な背景をもつ子どもたちが集まる学校で、官僚制組織の型にはまった対応を持ち込んでも、うまくいくわけがない。だから教員も妥協などをして、現実的な対応をする。

学校には毎年、次の新しい出生コーホート〈注〉が入学してくる。そのため留年者を多数出して、授業内容を理解するまで卒業させないような運用をしたら、運営できなくなるだろう。卒業には、定められた教育課程を修める必要があるのは当然だが、成績にこだわりすぎると、卒業できない生徒が多数出てくる可能性がある。だから、児童生徒の失敗に対して再チャンスを与えるとか、成績はよくないが、出席数は満たしているし、授業態度も悪くないからと進級を認めることはめずらしくない。

これは一種の「ルースな統制」だ。組織としての一体性を失わない範囲で、多少は内容面の変更を認め臨機応変に対応する。一方で、形式面で譲れない部分は譲らない。

形式的な部分を遵守することは、儀礼的なものだ。しかし儀礼だから重要ではないわけではない。私たちが学校制度を信頼しているのは、学習指導要領という基準があり、それを履修するルールがあり、そこでは資格をもつ教師が教え、教える場所である学校の設置には多くの規制が設けられているからだ。これは譲れないのである。そういう意味で、形式的な部分を遵守させるのは、「タイトな統制」だ。

要するに、ルースな統制一辺倒になってしまえば、教育機関としての正当性はもちえない。タイトな統制は儀礼に過ぎないのだが、これが存在することで正当性が保持され、私たちは学校組織を信用する。

教育機関は、C ルースな統制とタイトな統制の絶妙なバランスで成り立っている。確かに教育拡大が進むと、高校レベルの学習内容を完全に理解しているのか疑わしい学生が大学に多く進学してくる。このこと自体が問題視されることもある。ただ彼ら彼女らも、高校卒業か、同等の資格(現在であれば、高等学校卒業程度認定試験)をパスしているはずである。そこでは、確かに補習などの必要な学生が多数いるという点で、成績評価そのものは緩やかかもしれない。しかし一方で、出席数など外面から誰もが認めうる明瞭な基準は満たしてきたはずだ。

つまり下の段階の教育機関は、実際の成績評価を①アイマイにしながら、履修したという実績に基づき「学んだ」ことを認める。そして、その認定に基づいて、より上級の教育機関は入学を認める。したがって両者は、お互いが厳格な評価を行って連接しているのではなく、あえて評価にゆとりを残した状態で連接しているのだ。カール・ワイクの言葉を用いれば、異なる段階の学校の間は、緩やかに連結(ルースリー・カップリング)されているのである。

以上の説明は、現実の教育現場についての説明であり、そうあるべきだ、という規範的な主張ではない。官僚制組織の中に、一定のルースな統制を含めるのは、学校教育を成立させてきた一つの工夫だ。

儀礼は、そこにいる人の間に、何らかの象徴的な意味づけを与える以外に、実質的な機能をもたない。儀礼が行うのは、一種の権威づけだ。だからといって、儀礼に社会的な意味がないわけではない。儀礼的であるタイトな統制がなければ、人々はその組織を信頼しないし支持もしない。むしろ儀礼は、組織の存在に不可欠だ。

教育は、建前や儀礼が重要な意味をもつ。「教育によって全員が自己実現できる」「授業によって一〇〇パーセント、誰でもできるようにする」「教育は子どもの無限の可能性を引き出す聖なる営みである」という言葉は、文字通り受け取れば、偽善的で胡散臭く感じることもある。

だからといって、これらの言葉を教育現場の目標として掲げたとき、全否定するのも難しい。確かに建前なのだが、それらがあるから、人々は教育制度を信頼し、支えようとするのではないか。実現性は怪しいかもしれないが、目標を達成しようとする姿勢を学校現場が共有することが重要なのだ。その姿勢すら②ホウキしたシステムが、社会で信用されるはずがないのである。

近年、学校や教育現場における「評価」を重視する改革が進行している。筆者は、評価自体は否定しない。物事を改善させる前提には、現状把握がある。現状を反省する材料として、評価は役立つことも多い。問題は評価の仕方や使い方だ。ルースな統制と、タイトな統制というバランスで現場を成立させてきたという工夫を理解しないまま、ただ評価を厳格化し、基準を満たさなければペナルティを課すような改革を教育現場に導入すると、どうなるだろうか。

現場はおそらく、リスクを避け、クリアするのが容易な目標を設定するようになる。それが許されなければ、目標をクリアできない子どもや教師が続出することになる。結果として、学校の無力さが露呈し、ますます学校の社会的信用は揺らぐだろう。タイトな統制では、目標のクリアを目指すので、それが達成できなければ社会的に批判されて当然だからだ。Dこうして学校現場は、重苦しく、抑圧的な空間になる。このような組織の教員になることを、有能な若者が目指すだろうか。

（中澤渉『日本の公教育』による）

〈注〉 出生コーホート――同じ年に生まれた集団

問一　傍線部①②のカタカナを漢字に改めよ。

問二　傍線部A「社会に教育を従属させて考え」るとは、どのようなことか。最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　学校は社会の発展のため、人々の需要に応じた教育を行う必要があるということ。
2　学歴は正当な評価装置として認められているため、社会に広がっていくということ。
3　広く人々に認められた学校知を使用するため、教育が社会的信用を得られるということ。
4　ニーズに合った教育を提供するため社会が発展するという考えに対して、発想の転換を迫ること。
5　社会においては学歴が重要であるため、いい加減な指標で教育を評価してはいけないということ。

問三　傍線部B「教育制度は、神話によって成立する一つの宗教のようなものだ」とあるが、マイヤーらがそのように考える理由として最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　現在の教育制度のもとでは、選択の自由が優先され特定の学校に人々が集中し学校間格差が生じ、これが学歴信仰を導いてきたといういきさつがあるから。
2　近代国家としての体裁を保つために生みだされた教育制度を、人々は確証もないのに人間の社会化にとってもっとも合理的な制度だと考えて疑わないから。
3　学校組織や教育制度に影響を受けて人々は行動すると考え、教育制度を他の制度よりも重要視するという態度は、近代合理主義を前提にしているから。
4　学校は本来、近代化に伴い整備された官僚制組織であるにもかかわらず、それを無視して教育制度を過度に崇拝することは、現実逃避だから。
5　学校教育制度の成立・維持こそが組織的に人々を社会化するという発想はあまりに機能主義的であり、説明として合理性に欠けるから。

問四　空欄 ア ～ ウ に入る語の組み合わせとして最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　ア　したがって　　イ　さらに　　ウ　そのため
2　ア　したがって　　イ　また　　ウ　そのため
3　ア　そのため　　イ　したがって　　ウ　だから
4　ア　だから　　イ　さらに　　ウ　したがって
5　ア　だから　　イ　したがって　　ウ　また

問五　傍線部C「ルースな統制とタイトな統制の絶妙なバランスで成り立っている」組織の例として最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　始業・終業時刻も仕事のスケジュール管理も社員個々人に任せるというように社員の働き方を尊重する企業。
2　営業成績を上げるために社員が一丸となり、目標が達成できない時には深夜残業も辞さない企業。
3　ノルマを社員に周知徹底させるが、達成できない場合でも研修を受けさせることによって減給を避ける企業。
4　従来の年功序列による給与体系を改め、その人の売り上げによって月々の報酬額を決定する企業。
5　三百余年にわたりトップが世襲され、誇りを持った大勢の職人たちの技と経験によって続いてきた企業。

問六　傍線部D「こうして学校現場は、重苦しく、抑圧的な空間になる」とあるが、その理由として最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　タイトな統制を導入すると、厳格化した基準をクリアできない子どもが続出し、現場の教師だけでは指導することができずに学級崩壊を起こすことになってしまうから。

2　「教育によって全員が自己実現できる」などの偽善的で胡散臭い言葉のもとに学校が教育を行っていることが明るみに出て、社会から批判されてしまうから。

3　厳格な評価システムを導入すると、学校教育がこれまでルースな統制で成り立っていたことが公になり社会的な信用を完全に失ってしまうことになるから。

4　評価を厳格化するとタイトな統制が失われてしまい、学校現場は完全な官僚制組織になり多くの子どもや教師が脱落し、社会からの批判が高まるから。

5　容易な目標を設定すると教育の理念からはずれ、評価の基準が厳しくなれば脱落する子どもや教師が続出し、学校は社会的信用を失いかねないから。

問七　筆者が現代の学校教育の現場に最も必要だと考えていることは何か。本文中の語句を用いて四十六字～五十字(句読点も一字と数える)で記せ。

(二)

次の二つの文章は、諏訪正樹著『身体(からだ)が生み出すクリエイティブ』からの引用である。これを読み、後の問に答えよ。

I

異変を察知したり、理想状態との距離を感じ取ったりするのは、身体である。留意すべき変数のリストは頭にあるが、それを知識として一つ一つチェックするのではない。むしろ、身体で反応しようと「アンテナを張っている」[A]のだ。

社会学者の内田義彦氏は、著書『生きること学ぶこと』[内田 2013]の中で、「何かを聴こうとしていて、聞こえてくるものごとを逃さない」ことが肝要であると述べている。「きく」[B]にも、「聴く」と「聞く」の二種類があるということだ。

「聴」こうとするとは、すなわち、留意すべき変数群を念頭に置くということであり、もちろん大切だ。しかし、実際に「聞こえる」ことがその変数群だけにとどまっていてはいけない。リストアップした変数群は、あくまでもそれまでにその人が気づいた側面を表しているにすぎないが、現実はより複雑なはずだから。未だ気づいていないが「聞こえてくる」かもしれない側面はたくさん存在する。それを「聞き」のがさないようにすること。それが内田氏の言わんとすることだ。

新しいことが「聞こえてきた」としても、即、新しい変数を見出したとは限らない。リストアップした変数群で表現できることではなく、なんだか異様な体感を覚える。そんな違和感を見逃さないことも、「聞く」ことのうちなのだ。最初は違和感を覚えるだけかもしれないが、その正体を解ろうとより注意深く観察したり考えたりしていると、今まで気づいたことのない新たな変数を見出せるかもしれない。そうやって、リストアップされる変数が増える。

そんな意識を持って料理に向き合えば、日々、こつは磨かれていく。こういう意識を維持できるのはプロの料理人だけである、などということはない。何よりも食べることが好きであり、より美味しいものを食べたいと願って探究するマインドを持ち合わせていれば、アマチュア[C]でもできる。

「聴こうとしながら、聞こえてくるものごとを逃さない」という心持ちは、まさに探究マインドそのものである。そして、既に意識に上っている変数群の視点から外界の状況を観察しながら、まだ見ぬ新しい変数へのアンテナを張ることは、「フレーム問

題」を乗り越える方策でもある。あなたがただ「聴いている」だけなら、認識フレームを固定化して外界を見ていることになる。「聞こえてくるものごとを逃さない」ことと、臨機応変に身体の反応としてフレームを広げることは同じなのだ。

街の散策でも同じである。自分の中で定番の着眼点(変数)を念頭に街を見ていながら、新しい違和感を「聞き逃さず」、まだ見ぬ新しい変数を見つけることができたなら、街の散策はますます楽しくなる。

新しい変数を見つけると、既に定番の変数群と関係付けようとする思いが、芽生えるものだ。例えば、自宅と最寄り駅のあいだにある、曲線を描く長い坂道は、いたるところに樹木の葉が覆いかぶさっているとしよう。曲線を描いていること、そして木が覆いかぶさっていることから、道の先は見通せない。歩くごとに先の景色が徐々に立ち現れてくる。それが密やかな楽しみを感じさせてくれることを意識しているとしよう。

D 密やかさがあるということは、即ち、囲まれている感が強い。実際に、道の脇に建つ家々や覆い被さる木の幹や葉などに囲まれ、視界が空に抜けている箇所も少ない。

密やかな自分だけの空間ではあるが、身体を囲む様々なものに圧倒されるような圧迫感は露ほどもない。それはなぜだろうと、考える。この坂を上ると、いつも、道の先から、微かにそよぐ空気の流れを感じるからではないか？ E そう思い至ったとき、あなたはこの坂道のことを、今まで以上にわかったことになるのだ。

「曲線を描いている」、「樹木が覆い被さっている」、「見通せない」、「空への視界も抜けていない」、「物理的に囲まれている」は、前々から気に留めていた変数群である。そして、「密やかな楽しみ」、「自分だけの空間」は、その変数群の関係の上に成立する、自分なりの意味解釈である。

ある日ふと、「坂の上からそよぐ空気の流れ」という新しい変数に気づいたおかげで、あなたは「圧迫感がない」という新たな意味をこの坂道に見出したのだ。自分だけの楽しみを覚えながら歩くことができるのは、実は、空気が流れているのを生身の身体がいつも感じ取っていて、物理的には囲まれていても精神的に圧迫感がなかったからなのか！　そう理論づけたのだ。

そのとき、もうあなたは、この坂道の虜になっている。街の散策自体の虜になっていると言ってもよいかもしれない。様々な

変数に着眼し、それらの関係性に意味を見出し、「街の感じ方」というこつを一つ体得したからだ。街には多種多様な空間が潜んでいる。その各々の空間に応じて、街を感じるこつを一つずつ見出していくことになる。

大学の同僚の社会学者、加藤文俊さんと私は、一年半に亘って東京の街を歩き、そういうこつを全部で四九個収集した。

(中略)[F]対象についてこつを多数体得するようになると、その対象について自分なりの理論を築き上げているものだ。

様々な変数への着眼、意味解釈の付与、こつの体得、理論の構築という一連の過程はまさにクリエイティブであり、そうやって身体知は、日常生活の中で育まれていく。探究心さえ持ち続ければ、誰もが、生活に新たな工夫を施し、生活の質を変化させることができる。「クリエイティブは生活に溢れている」というのはそういう意味である。

Ⅱ

もちろん、クリエイティブにも段階がある。ラーメン屋のカウンターで相談を受けている時に、臨機応変に相槌をして、適正な間をつくりだしながら応答するというクリエイティブと、大喜利の粋な解答を思いついたり、爆笑を誘うような一言を瞬間的に繰り出したりする芸人のクリエイティブには差がある。誰もが後者のようにできるわけではない。

重要なのは、AIの現状を俯瞰すればわかるように、前者の能力だけでも十分クリエイティブであり、そのメカニズムはまだ未解明であること、しかし我々の身体は現にそれをやってのけていることを、我々自身が自覚することである。

そして、クリエイティブの能力を根底から支えているのは、頭(知識の適用)ではなく体感にしかと向き合い、[G]身体の反応として脳裏に浮かび上がってきたことを外に吐き出す行為である。そういう習慣を、是非、日々の生活の中で形成したいものである。他でもない自分の身体に生じている体感に向き合い、その微妙な差異を感知したり、融合したりすることを、生活の中で実践することである。

生活を形づくっているものごとは多岐にわたる。人それぞれ、重きをおく領域や生活行為が異なる。体感に向き合うという実践を日々の生活の中で営むことができるのは、どんな領域か？　身体の感覚に正直になり、それを徐々に見出すことから始める

のがよい。興味を持てる領域や生活行為を見出すことができれば、そこにクリエイティブの種が一つ生まれる。

ひとたび、ある領域や行為でクリエイティブな習慣を形づくることができたなら、別の領域や行為でも、同様な習慣を形成することは容易になるはずである。(中略)新しい変数に着眼し、個性を反映した意味や解釈を付し、独自の固有性を孕む理論を築き上げることが、クリエイティブな知を醸成するための基本だからである。それは、領域や行為を越えて通用する、何ものにも代えがたい認知資産である。

問一　傍線部A「アンテナを張っている」と**反対の**行為を次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　身体の違和感を見逃さないようにする。
2　留意すべき変数群を念頭に置く。
3　探求マインドをもち続ける。
4　身体の感覚を研ぎ澄ます。
5　認識フレームを広げる。

問二　傍線部B「『きく』にも、『聴く』と『聞く』の二種類がある」とあるが、ここで筆者の言う二種類の例として最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　都会の喧噪を喧噪として全身で受け止めるのが「聴く」ということであり、それぞれの音がどこから来る何の音かを聞き分けるのが「聞く」ということである。

2　料理のレシピに従いにんにくを炒める際のフライパンの音に注意するのは「聴く」ということだが、その音は気にせず規定通りに炒めるのは「聞く」ということである。

3　貝殻を耳に当て海の音を楽しもうとするのが「聴く」ということであり、耳元で鳴る慣れ親しんだ音の発生理由を探るのが「聞く」ということである。

4　鳥の種類を判別すべく鳴き声に耳を傾けるのは「聴く」ということだが、初めて出会った鳥の声にじっくりと耳を傾けるのは「聞く」ということである。

5　エンジン音から愛車の調子を見て取るのが「聴く」ということであり、その音のみならず走行感も含め総合的に分析するのが「聞く」ということである。

問三　傍線部C「アマチュアでもできる」とあるが、どのようなことができるのか。次の1～5の中から最も適切なものを一つ選び、その符号をマークせよ。

1　注意深く観察・考察していれば物事の新たな変数を見出せるかもしれないという意識を持ち続けること。

2　既知の変数群ではない新たな変数は必ずあるので、それが見出されるまで安心して待ち続けること。

3　違和感の正体を解ろうとする意識をもちながら、プロの料理人に助言を乞い日々美味しい料理を作り続けること。

4　食べることを愛し、より美味しいものを探究する意志を持ち続けることで、技術を高めて評価を得ること。

5　未だ気づいていないが「聞こえてくる」かもしれない変数を期待しながら、ひたすら料理を食べ続けること。

問四　傍線部D「密やかさがあるということは、即ち、囲まれている感が強い」とあるが、その説明として最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　落ち着いた自分だけの思索世界というのは、情報が制限され先が見通せないという不安要素も感じられるものである。
2　家や覆いかぶさる木により頭上の空が見えないため、日常の道徳観から解放されているように感じられる。
3　人に知られていない自分だけの世界がそこにあると感じるのは、物理的に閉ざされているという感覚による。
4　人や日常的出来事に囲まれているが、そこから少し離れているため、あやしい感覚が生まれる傾向が強い。
5　静かで寂しい感じがするということは、視界がさえぎられ情報が絶たれることで、孤立した気持ちになる傾向が強い。

問五　傍線部E「そう思い至ったとき、あなたはこの坂道のことを、今まで以上にわかったことになる」の意味として最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　様々な変数に着眼することで新たな身体感覚が生まれ、空間に種々の意味を見出し散策の虜になる。
2　今までにない体感を得たとき、「自分だけの空間」には「圧迫感がない」という新たな変数が見いだせる。
3　新しい変数に気づくことによって、この坂道を見直し、自分なりの意味を加えることとなる。
4　囲まれていると感じるのは視界制限のためであり、本当は「圧迫感がない」ことに気づくことができる。
5　生身の身体感覚が新しい変数と結びつけば、今まで培ってきた自分なりの物の見方が明確になってくる。

問六　傍線部F「対象についてこつを多数体得するようになると、その対象について自分なりの理論を築き上げている」とあるが、その例として**適切ではないもの**を次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　レストラン巡りを続けていると、どんな場所に行けばおいしい店があるかが分かるようになり、探索のプロとなる。
2　対戦型ゲームを続けているとルールや操作法にも習熟し、独自の新たな攻略法が勝利をもたらすようになる。
3　初めて訪れた土地でたまたま見つけた古書店に入ると、長年探し求めていた貴重な一冊と出会うことがある。
4　犬の訓練士は犬の散歩をしつつ犬の個性を認識し、その犬の好きな散歩コースを適切に選べるようになる。
5　多数の入試問題を解いていると時間配分・思考法などが自然に身につき、その結果、成績が上がってくる。

問七　傍線部G「身体の反応として脳裏に浮かび上がってきたことを外に吐き出す行為」とあるが、その具体例として最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　突然浮かんだアイデアを忘れないように記憶する。
2　夜中に体調の異変を感じたので体温を測定する。
3　学校で教わったことをその日のうちに読み返す。
4　いつも通りの包丁の切れ味を確認して安心する。
5　旅先で感じた潮の匂いをその場で短歌に詠む。

(三) 次の文章は「栄花物語」の一節である。藤原伊周は弟の隆家とともに流罪となったが、許されて筑紫から京に戻り、家族と再会する。次の文章を読み、後の問に答えよ。

十二月に上り着かせたまひ、かの致仕〈注1〉の大納言殿にこそはおはし着かせたまへる。上〈注2〉をはじめたてまつりて、殿の内〈注3〉の人々喜びの涙ゆゆし。殿の有様など、A昔にあらずあはれに荒れはてにけり。上も何ごともえ聞えさせたまはず、ただ涙におぼほれて見たてまつりたまふ。松君〈注4〉のいと大きになりたまへるをかき撫でて、いみじう泣かせたまへば、松君もいかに思すにか、目をすりたまひ、いとうれしと思したるも、あはれにことわりなり。殿、

①浅茅生と荒れにけれどもふる里のB松は木高くなりにけるかな

また、殿、

来しかたの生の松原いきてC来て古き都を見るぞ悲しき

とのたまへば、上、

そのかみの生の松原いきてきてD身ながらあらぬ心地せしかな

とのたまふ。「まづ宮へ参らむ〈注5〉」とて、急ぎ出でさせたまふにも、女君涙こぼれさせたまふ。

宮の御前、②単の御衣の袖もしぼるばかりにておはします。「E何ごとものどかになむ」など申させたまふ。宮たちさまざまにいみじううつくしうおはしますを、一の宮〈注6〉をまづF抱きたてまつらまほしげに思せど、「いまいましうのみ、もののおぼえはべりて」と、G聞えさせたまふほども、なほいと世は定めがたし、平らかに誰も御命をたもたせたまふのみこそ、世にめでたきことなりけれとのみぞ、見えさせたまふ。

故上〈注7〉の御事をかへすがへす聞えさせたまひつつ、誰もいみじう泣かせたまふ。よろづ一つ涙といふやうに見えさせたまふも、あはれに見えさせたまふ。

〈注1〉 致仕の大納言殿――源重光の邸。
〈注2〉 上――藤原伊周室で源重光の娘。
〈注3〉 殿――源重光邸。
〈注4〉 松君――藤原伊周の息子。のちの藤原道雅。
〈注5〉 宮――藤原定子。当時は一条天皇中宮であった。藤原伊周の姉。
〈注6〉 一の宮――藤原定子が産んだ敦康親王。
〈注7〉 故上――藤原伊周の母、高階貴子。

問一　傍線部①②の語句の読みを**ひらがな(現代かなづかい)**で記せ。

問二　傍線部A「昔にあらずあはれに荒れはてにけり」は邸内の過去と現在の変化を述べることで、移りゆく世の無常を表現している。他に世の無常を示した箇所を本文中から八字以内(句読点も一字に数える)で抜き出して記せ。

問三　傍線部B「松は木高くなりにけるかな」には二つの意味が込められている。それぞれ簡潔に記せ。

問四　傍線部C「いきて」は掛詞であるが、何と何が掛けられているのかがわかるように、それぞれ三字で記せ。

問五　傍線部D「身ながらあらぬ心地」の解釈として最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　我が身の上に降りかかった災厄をすべて覆す強靱さ
2　我が身の上には受け入れることのできない気持ち悪さ
3　我が身の上のことでありながらも感じるやましさ
4　我が身の上に起こったこととは思えないほどの悲しさ
5　我が身の上に起きるかもしれないことへの恐ろしさ

問六　傍線部E「何ごとものどかになむ」の解釈として最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　いずれにせよ、のんびりした人にお任せしましょう。
2　万事、のちほどゆっくりとお話ししましょう。
3　あれこれ、節度を守って進めてまいりましょう。
4　すべて、じっくりと解決していきましょう。
5　何はともあれ、ひっそりと静かに暮らしましょう。

問七　傍線部F「抱きたてまつらまほしげに思せど」を現代語訳せよ。

問八　傍線部G「聞え」は誰に対する敬意を示すのか。最も適切なものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　致仕の大納言　　2　殿　　3　松君　　4　宮　　5　故上

問九　本文の内容に合致しているものを次の1～5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1　伊周がようやく都にたどり着いたとき、家族の多くは亡くなり、かつて住んでいた家も失うなど、地獄のような現実が待ちうけていた。

2　伊周は再会を喜んで松君の頭を優しく撫でたが、貴族社会の中で過酷な人生を歩まざるを得ないことを理解してひどく涙を流した。

3　伊周は京に戻って妻や松君、定子などとともに過ごしたかったが、一方、定子は兄弟とはいえ流罪に処せられた伊周と関わりを持ちたくなかった。

4　伊周が入京してきたと聞いてその妻は感激したが、定子は一族の運命が既に尽きている事実にうちひしがれて、邸の手入れをさせずに荒れたままにしていた。

5　伊周は都に戻ったとき、妻や松君と再会した際も、亡くなった人を偲ぶ際も涙を流したが、うれしい涙も悲しい涙も涙であることに変わりはなかった。